

2025年度 授業改善アンケート集計結果に対する意見

社会イノベーション学部

学部長 南山浩二

科目開設部門が社会イノベーション学部である授業科目において、2025 年度に実施された授業改善アンケートの結果全体について、コメントを述べることにしたい。授業改善アンケートの集計結果をみると、2025 年度授業も、概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたと考えられる。

授業全般に対する評価である項目 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」の平均値は 4.38 点と高い値を示している。2023 年度、2024 年度、それぞれの平均値が、4.39 点、4.38 点であり、授業全般に対して高い総合的評価を維持しているといえる。また、項目 12「この分野への興味・関心が引き起こされた」の平均値も 4.24 点（2024 年度 4.24 点）となっており、項目 14 との相関係数（ r ）をみると 0.79 と顕著な相関を示していることから、当該分野への興味・関心が引き起こされたことが高い総合的評価に結びついているとも考えられる。

教員による授業の適切な実施や学習意欲を高める取り組みに関する 9 項目であるが、すべての項目において、平均値が 4 点以上となっている。まず、授業の適切な実施に関する基本的な側面といえよう 5 項目を見てみると、項目 4「シラバスと授業の内容は一致していた」が 4.51 点（2024 年度 4.54 点）、項目 3「教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた」が 4.48（2024 年度 4.51 点）、項目 6「教員は教室内が学習にふさわしい状態（私語等対応）に保たれているよう心掛けた」が 4.44 点（2024 年度 4.48 点）、項目 5「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」が 4.42 点（2024 年度 4.40 点）、項目 7「教員の板書・授業資料は見やすかった」が 4.37 点（2024 年度 4.35 点）となっている。これらの項目と項目 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」との相関係数（ r ）をみると、いずれの項目も顕著な相関を示しており、項目 7「教員の板書・授業資料は見やすかった」が 0.61、項目 5「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」が 0.59、項目 4「シラバスと授業の内容は一致していた」が 0.56 であった。授業の総合的評価にとって、まずは、授業実施のあり方の適切性が重要であることが理解できる。

受講生の学習意欲を高める教員の取り組みに該当すると考えられる 4 項目についてであるが、項目 9「教員は質問への回答や課題の返却・解説等を十分にしていた」が 4.38 点（2024 年度 4.38 点）、項目 13「この授業のレベルは適切であった」は 4.30 点（2024 年度 4.31 点）、項目 8「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促していた」が 4.20 点（2024 年度 4.18 点）であり、項目 10「授業の課題は適量であった」について「適量」と回答した割合が 77.2%（2024 年度 74.1%）に及んでいる。これらの項目と項目 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」との相関係数（ r ）をみると、項目 10「授業の課題は適量であった」以外の 3 つの項目で顕著な正相関を示している。この結果から、授業実施のあり方の適切性に加えて、学生が授業内容への理解を深めていくことができるよう教員が取り組むことで、学生の学習意欲が高まり、授業についての高い総合的評価に結びついているものと考えられる。

そして、授業に対する学生の取り組み状況に関する3項目である。項目1の出席状況では、「①0回」35.2%（2024年度35.5%）、「②2～1回」45.9%（2024年度45.0%）であり、項目2「この授業の内容を理解するために努力した」の平均値は4.33点（2024年度4.34点）となっており、学生が真摯に授業に臨んでいる姿勢を読み取ることができる。しかしながら、項目11「1回分の授業にあたり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均時間」に対する回答を合算すると、1時間未満が74.7%（2024年度72.1%）と、2024年度と同じく7割をこえており、事前・事後学習をさらに促していくことが引き続きの課題となっている。これらの項目と項目14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」との相関係数（ r ）をみると、項目2「この授業の内容を理解するために努力した」のみが比較的強い相関を示していることから、授業時間以外での継続的な学びをどのように促していくかが課題となっているといえることができる。

また、本アンケートでは、「授業で用いられた授業手法」と「授業を通じて身につけた資質・能力」についての質問も設けられている。「授業で用いられた授業手法」については、「課題（レポート等）」が2024年度と同じく74.7%（2024年度73.4%）と顕著に高く、次いで、「グループワーク」が28.6%（2024年度26.3%）、「学生によるコメントペーパー」が23.8%（2024年度25.6%）、「質疑応答」19%（2024年度19.8%）となっており、本学部では様々な授業手法が採用されている状況がみられる。「授業を通じて身につけた資質・能力」については、その分野の知識・学力のみならず、言語運用能力、コミュニケーション能力、論理的思考力、柔軟な発想力など多様な資質・能力の涵養につながっていることがうかがわれる。科目開設部門が社会イノベーション学部である授業科目には、授業手法や身につけた資質・能力について以上のような特徴があるが、さらに検討を続けていく必要があるだろう。

最後に、本学生授業改善アンケートは、「実施必須科目」では96%と実に9割をこえる科目で、「実施任意科目」においても69.4%（2024年度70.5%）で実施されており、授業に参加していた多くの学生の評価を十分にふまえた結果であるといえるだろう。他方で、延べ履修者数に対する延べ回答者数は約7割程度にとどまっており、また、各項目において「無答・無効数」が一定数あることから、告知方法やアンケート項目の工夫など、アンケート実施のあり方について適宜全学的に見直していく必要があるといえるだろう。